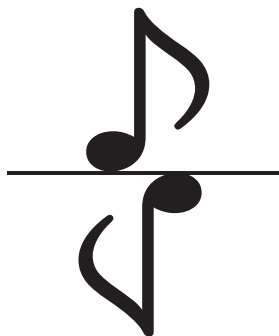


児 童 詩 歌

第 19 号



白百合女子大学児童文化研究センター
近現代児童詩歌研究プロジェクト

目次

はじめに	……	宮澤賢治	……	1
中川ひろたかの「あそびうた」研究（八）				
——『とんぼ&ピーマンのあそびうたクラブ』の作品……	宮崎麻子	……	2	
竹久夢二『京人形』に関するノート	……	伊藤かおり	……	14

はじめに

宮澤 賢治

コロナ禍の四年を経て、やっとマスクを取っても良い、という世間のお許しが出たが、巷ではまだまだコロナが流行っていて特に若い人たちの間ではすぐに感染が広がるということも耳にしているこの頃です。そして今年もこの「児童詩歌」の発行の季節となりました。私も賢治童話の中の詩歌特に、童謡についての各論もそろそろと思っています。最近では昔のような「国語と国文学」や「解釈と鑑賞」と言った専門誌での研究の現在が見えないので、それぞれの研究者たちの苦勞が偲べますが、何とか昔のような研究環境が復活するのを待ち望んでいます。さて、今号では常連の伊藤さんが「竹久夢二『京人形』に関するノート」を、さらに宮崎さんは「中川ひろたかの「あそびうた」研究（八）——『とんぼ&ピーマンのあそびうたクラブ』の作品」を寄稿されました。ご意見、ご感想などありましたら、どうぞおよせください。当研究会には他に若い研究者が二、三名所属しています。来号に期待します。また編集に興味のある方もどうぞご参加お願いします。子どもの詩歌研究にもつと光を！

中川ひろたかの「あそびうた」研究（八） ——『とんぼ&ピーマンのあそびうたクラブ』の作品

宮崎 麻子

湯浅とんぼと中川ひろたかの共作である『とんぼ&ピーマンのあそびうたクラブ』（チャイルド本社、二〇〇三年五月）は、コンビ五冊目となる楽譜集にCDが付属した「CDブック」として発行されている。ふたりの最初の楽譜集『あそびうたがいつぱい』（ぼるん舎）を一九七九年に発表して以降、『ちびっこくらすのあそびうた』（全国社会福祉協議会、一九八三年二月）、『とんぼ・ピーマンのカレンダーソング』（全国社会福祉協議会、一九八六年一月）、『あそびうた本 かえるのロボット』（草葉社、一九八六年九月）と順調に冊数を重ねてきたが、四作目の発表から本書刊行に至るまで、一六年以上の時間を要している。

実はこの期間にも「保育の友」誌上で「とんぼ・ピーマンのあそびうた倶楽部」（一九九五年六月～一九九九年三月）を連載し、隔月のペースで二作品ずつ、合計で四六作品を発表しており、コンビとしてあそびうた創作活動は続いていた。

本書はこの「とんぼ・ピーマンのあそびうた倶楽部」作品をまとめることを目的にしながら、「当時作った歌の半分以上を作り変えました。もとの歌のイメージがあまりなくなつて、ほぼ新作というものも随分あります。何

年間かのお互いの成長があつたなと思いますね」と、湯浅が説明するように、長い時間をかけて出版に至つたことがうかがえる。

前稿で論じた『あそびソングブック』（ひかりのくに株式会社、二〇〇〇年八月）を中川の「あそびうたの大詰め」「集大成」と評していたように、本書も湯浅と中川コンビの「あそびうたの大詰め」「集大成」の様相を呈しているように思われる。それ以上に「新しい時代のあそび歌の本を作り出したって感じがしますね。このCDブックすばらしいですよ!」と自画自賛する中川の言葉のとおり、二一世紀の新しい風の到来が感じられるあそびうたのCDブックが完成している。また、前稿で中川の活動を「進展と成熟の時代」と位置づけたが、二〇〇三年は自叙伝『中川ひろたかグラフィティ』刊行を果たし、更なる成熟と豊かさに充ちた時期だったようだ。初出の連載「とんぼ・ピーマンのあそびうた倶楽部」の作品を確かめながら、『とんぼ&ピーマンのあそびうたクラブ』の考察・分析を進め、中川・湯浅のあそびうたを総括していく。

CDブック

本書の帯には、次の一文が記載されている。「とんぼ&ピーマンの名コンビが復活!いまや保育界のスタンダードとなった名作一〇作品をはじめ、新曲、単行本未収録曲、あわせて三九のあそびうたをおさめたCD Bookがついに登場。あそびうたつて、やつぱりおもしろい!」。本書の企画と内容について、端的な説明がまとめられた広告文である。この一文にも記述があるCD Book（注、以降はCDブックと表記）という形態で発行されたことは、既刊の楽譜集と一線を画す大きな特徴である。

中川はこれまで、音楽CDを別途制作し発売する方法で、自らのあそびうたや子ども讃歌を世の中に広めてきた。故にCDについて、何も新しい試みではないように考えられるかもしれないが、今回はCDが楽譜集に付属されているため、楽譜集とCDが同時に入手できる手軽さが促進し、簡易に楽しむことができる利点がある。加えて書籍に音楽CDを付帯する仕様は、恐らく当時の流通の側面からも、より入手しやすい書籍流通に合わせた策を検討したのではないかと推察できる。その上、価格面においても楽譜とCDそれぞれを購入するよりも安価になることから、多くの保育者・大人に手に取ってもらいやすい効果が期待できるという点もある。

本書の出版は、二〇〇二年一二月頃には決まっていたようで、二月一日に出版社での打合せが行われた旨、中川のウェブ日記に記されている。翌年二〇〇三年の一月末には『あそびうたクラブ』は、楽譜集にCDをつけてCDブックになる予定であること、「中川ひろたか一人アレンジ演奏ものにしよう」という方向で企画が進んでいることが語られている。二月に入ると、中川は録音作業に集中して、二月二三日には収録曲三〇曲（全二九曲＋ベスト一〇曲メドレー）の録音を終えている。三月二五日には湯浅をはじめ、イラスト担当の長谷川義史、ケロポンズ、編集担当も加わり、うたとコーラスの録音を完了。四月にはトラックダウン・マスタリングの工程に進み、この時にメドレー一〇曲は諸事情により割愛されて、全二九曲の収録となっているが、この一〇曲は後日別途CDとして発売されている。

完成したのは、五月一日、そして三〇日より発売開始された。中川はこれまでシンガーソングライターの活動、子どもの歌の専門レーベル「ソングレコード」の設立などの実績を積み上げてきたが、今回は曲のアレンジと収録まで一人でこなす活躍を遂げていることに注目しなければならないだろう。

『とんぼ&ピーマンのあそびうたクラブ』の作品

本書の構成は、ふたりの定番で人気の作品が再録された「とんぼ&ピーマンのBest 10 Collection」を巻頭に、「手あそび」「四作品」「ペープサート」「五作品」「身体表現」「九作品」「人形ほか」「四作品」「うた」「五作品に加えて」「オーブニング曲」「エンディング曲」が各一作品配されている。総作品数は三九作品、付属のCDには二九作品が収録されている。イラストは長谷川義史が全て担当し、本文六四ページのうち半分は厚手の紙にカラー印刷で仕立てられており、絵本のような雰囲気がある。まさにふたりの集大成にふさわしい贅沢なしつらえ、そしてコンサートのセットリストのような多彩な内容と充実した作品数である。

先述したとおり「あそびうた倶楽部」は、一九九五年六月より「保育の友」誌上で連載を開始。約四年間かけて、四六作品が発表されている。こちらのイラストは藤本としひこが担当して、遊び方の説明や工夫が描かれている。本書には、この連載作品から二二作品が所収されている。

今回は主に「保育の友」に発表された「手あそび」「身体表現」作品を中心に、保育者が子どもに歌って聞かせる「うた」作品について考察する。前書きに記された「何年間かのお互いの成長があった」点を確認しながら、今回も中川のあそびうたの変遷を捉えたいと思う。あそびうたの集大成と呼べる要素や前作まで作品とどのような変化・成熟があるのか検討する。

「おはようクルトン」

クルクルトントン／クルクルトントン／クルクルトントン おはよう
クルクルトントン／クルクルトントン／クルクルトントン おはよう

朝ご飯のポタージュに入っている「クルトン」をテーマに、クルクルトントンというオノマトペを繰り返す。オノマトペは身体感覚に働きかける効果、相手に簡潔に伝わりやすい効果などがあり、テンポよく歌えて遊べる。二人が向かい合い手を合わせてクルクルトントンするイラストが描かれ、「体を触れ合って遊ぶ歌」と紹介されている。ポタージュをクルクル手のひらの上でまぜてトントン手を合わせ、おはようで頬を両手ではさむ触れ合い、スキンシップのあそびうた。ヴァリエーションとして、背中を使つてクルクルトントン、頬を合わせるやり方も紹介されている。

初出は、「おはよう」(「保育の友」四三(一一)、一九九五年八月)という題名で、詞とメロディもやや軽めである。

クルクルトントン／クルクルトントン／あさがきた (あさがきた)

ピョンピョンおはよう チュンチュンおはよう／おはよう (おはよう)

同じ八小節の短い作品であるが、四小節目・八小節目は全体符で構成されているため、あつけなさや単純さが際立っている。グーをつくつて両腕をクルクル回してグー同士をトントンぶつける手あそびは、うさぎやすずめになりきりながら朝のあいさつを繰り返す。あいさつの展開例で、隣の人にあいさつをしたり、「クルクルトント

ン よるがきた こんにちは」でもあそべることが記されている。

挨拶をテーマにした作品は、これまでも数作品あり、一日の始まりの挨拶「おはよう」を気軽に発語できるように、どちらもクルクルトントン手あそびしながらリズムカルに「おはよう」へのうたの仕掛けがある。元気な挨拶は、相手の存在を認める行為であり、コミュニケーションの第一歩として大切だという考えのもと、多彩に「おはよう」をうたっているのだろう。

「ちっこい魚」(「保育の友」四四(二)、一九九六年二月)

ちっこいさかな おおきくなれよ／いろんなかわで いっぱいおよう

おおきくなったら そらとぼう (ジャンプ)

本書では、六小節目の「そらとぼう」に二番三番の詞として「うみいこう」「くじらになろう」が追加している。おおきくなったらどうなるのか、最後に問答歌の形式でうたっている。小さな魚が空を飛んだり、海に行ったり、くじらになったり、子どもたちの想像する世界の大きさの中で大きなスケールを感じさせるうたが展開している。

中川は、絵本『おおきくなるっていいこと』(童心社、一九九九年一月)で「おおきくなるっていいこととは／ようふくがちいさくなるってこと」「あたらしいはがはえてくるってこと」「みずにかおをながくつけられってこと」「ちいさなひとにやさしくなれるってこと」など、身体の成長や変化とともに心の成長について「おおきくなるっていいこと」は素敵なことだと繰り返し、成長する喜びを語っている。

この作品も「おおきくなれよ」と子どもたちに大きくなること、成長することを励まし、肯定する中川の声がやさしく響いている。大きくなったら、小さな魚でも空が飛べるのかもしれない。子どもたちに、成長することを励ます応援歌が届けられた。

「山道あるけば」（「保育の友」四三（二六）、一九九五年一二月）

やまみちあるけば かぜになる（ヒュン）／かぜとあるけば くもになる（ホワ）

くもとあるけば とりになる（チュン）／ララララララ ラララララ

やまみちあるけば あめになる（ザワン）／あめとあるけば はなになる（ホ）

はなとあるけば ちょうになる（ヒラ）／ララララララ ラララララ

「保育の友」の連載には「森の後ろの山道を歩いていくと、風になったり、雲になったり、小鳥になったりできるのです。すてきなすてきな山道です。みんなも一緒に歩きませんか」とお話が添えられている。園や屋内、お散歩の途中でも歌いながら、風や雲や小鳥に変身するあそびうたである。変身遊びがどんどん繋がっていく楽しさと、オノマトペの響き、「ラララ」のハミングもユーモラスで陽気な気分が盛り上がる特徴が挙げられる。

子どもたちにとって変身遊びは、主題・題材の特徴にあわせてどのように変身しようか、自分なりに考えて工夫し、全身を動かす行為である。また、変身遊びにより表現する楽しさを体験する。身体表現で何にどのように変身するか、創造性に響くうたといえる。

山道をイメージしているので、焦らずゆつたりとした速度で変身できること、弾むメロディが繰り返されていること、オノマトペも変身のタイミングをつかみやすく、簡易なように見えて綿密な工夫がなされていると評価できる。

「保育の友」の連載に発表された最初の作品は、「お月さん」と「赤いりんご」の二作品。湯浅が「およそ一〇年ブリのコンビ復活です」と紹介して、「現実とうそつこの世界をいつたりきたりしてあそびながら、さて、どんなうたがうまれてくるやら心配という味付きの楽しみです」と心境を語っている。中川は「とんぼさんの詞は、どれも、とんぼくさい。とんぼくさい詞にぼくが曲をつけると、とんぼとピーマンがまざった、なんかへんてこなにおいのうたになる。だけど、いいんだ、これが。このにおい、子どもたちにかがせてあげてね。すごく好きになってくれるって、信じてる。ほんと、ぜったいだよ」と矜持を示している。

「お月さん」（「保育の友」四三（七）、一九九五年六月）

おつきさん おまんじゅう／おつきさん アイスクリーム

おつきさん ひこううせん／おつきさん おかあさん

八小節のシンプルな旋律。そこはかといない切なさが喚起されるメロディは、一・四・五・八小節目が同じ「ララーソラ」が繰り返されるので、モチーフとなって耳に残る。おつきさんの後におまんじゅうやアイスクリームと続き、

遊び方のイラストには、展開例として「三日月はバナナみたい」と「ホットケーキ」が描かれて、即興で豊かなヴァリエーションで遊びながら身体を動かせるように促している。特に意味や論理があるようにには思われないが、「おつきさん」が何度も歌われることから、リズムが生まれている。

本書では、主に詞に手が入られて次の作品が収録されている。

おつきさん おまんじゅう／おつきさん すすき

おつきさん おせんべい／おつきさん おかあさん（おとうさん・おばあちゃん・おじいちゃん）

八小節目が四番まで加筆されているので、初出の作品よりも長く遊ぶことができる。「身体表現」の作品で、遊び方のイラストによると、「おつきさん」では、丸い満月を頭の上で両腕を輪にする動きの説明がある。両腕を頭上に上げたり下げたり、屈んだり寝そべったりと、言葉から連想されるものを全身で表現しながら、身体を大きく動かすなりきりあそびの作品。月から連想されるおまんじゅう、すすき、おせんべいになりきりながら、最後に大好きな家族たちに思いを馳せている。古来より日本人にとって自然の美しさや心情を表現するのに「月」の存在は大きかったといえるが、現代においても都市部でも月を見上げることで自然を感じる時間に繋がっているのではないだろうか。もの悲しい印象のメロディは、野口雨情の「十五夜お月さん」にも通じるイメージであり、極めて日本的な月への思いというたの余韻が残る作品である。

「いやいやのうた」

おそとであそぼうよ イヤッイヤッ／てをつなごうよ イヤッイヤッ

おさんぽしましよ イヤッイヤッ／あーららバナナたべよう ハイッ！

おもちゃであそぼうよ イヤッイヤッ／とりっこなしたよ イヤッイヤッ

ごはんにしましよ イヤッイヤッ／あーららバナナたべよう ハイッ！

子どものイヤイヤ期を捉えた問答歌形式のあそびうた。「保育の友」四五（二三）、一九九七年一月発表の作品も、人形を用いて保育者が子どもたちに見せて遊ぶ作品として紹介されている。イヤイヤ期は、自我が芽生え自己主張が強くなり「イヤ」を繰り返す一歳後半から三歳ごろまでの時期をいう。第一次反抗期、魔の二歳児と呼ばれる一時的なもので、前頭前野の機能が発達すると自分の気持ちをコントロールできるようになり、三歳・四歳で減少する傾向にあるという。

子どもの成長の証であり、成長過程を捉えたベテラン保育者の湯浅の詞が、明るく軽快でコミカルな旋律にのせられて、イヤイヤ期に直面する大人側の気持ちに楽になる効果が期待できる。子守歌は歌っている歌い手への励ましといわれるように、保育者だつて大人だつて気持ちが疲弊してしまう時がある。

そして子どもは、人形で表現されるイヤイヤ期の歌を客観的な目で理解することができるとは思えないだろうか。イヤイヤする自分や身近な兄弟や友人が、人形となって登場する。それを直接批判したり、変えようとするのではなく、人形があそびうたの中でどのような態度で返事をしているのかを見て、伝わることもあるだろう。子ど

もが他者とのようにかかわりあい、コミュニケーションを重ね信頼を築くことに向かうのか、考えることに繋がるあそびうたでもある。

紙面の都合により全作品の考察ではないが、作品の特徴として一貫しているのは、子どもたちをユーモラスに楽しく遊ばせながら、保育者も一緒に面白がって歌い演じる作品が揃っている点だといえる。手遊び・身体表現をとおして、人とスキンシップするあそびうたが多いことも注目する点である。身体を適度に動かしながら、スキンシップするあそびうたは、子どもはもちろん、保育者や大人（親や家族）にとっても愛情ホルモンと呼ばれるオキシトシンが分泌されて、安心感や幸福感が高められるといわれる。「だっこだいすぎ」では、「だーこだっこだっこ／だっこしてる」とあたたかいぬくもりをダイレクトに歌うだけで、子どもは「愛されている」「守られている」感情に満たされ、情緒が安定し、良好な人間関係を育むことができるようになるだろう。子どもが誕生し、成長する過程で大切な要素が、ごく自然に穏やかにうたわれていることが、中川作品の特質であり何よりの魅力である。

また、これまでの作品と同様、シンプルで楽しいあそびうたであること、子どもを勇気づける大人からの声援を常に力まずに送っていることは変わらないが、特に今回は、保育者（大人）への励まし・癒しも得られるような清々しさと爽快さがあるように思われる。楽曲はいずれも、いわゆる教科書的でないゆとりや大らかさが際立ち、遊びの範囲が広い歌に仕上がっている。故に、即興性やヴァリエーションの広がり・発展にも繋がる。

オープニング曲「ポケットにそよ風をいれて」の「そよ風」は、穏やかで心地よい湯浅と中川のあそびうたそのものだと言言できる。詞の中でポケットに次々入れていったのは、「生きている喜び」「さり気ない言葉」「素敵な香り」「遊び心」であり、これらはふたりのうたの主題でもある。ふたりにとって今回の「新しい風」は、いつも以上にやさしいそよ風となって、子どもとその周辺に歌声を乗せて吹いている。

二〇二二年一月、湯浅は八一歳の生涯を終えた。とんぼ・ピーマンによる新作発表は、叶わなくなってしまった。本書は、ふたりの最後のあそびうた楽譜集になってしまったのかもしれないと思うと、残念でならない。

使用テキスト

湯浅とんぼ・中川ひろたか『とんぼ&ピーマンのあそびうたクラブ』チャイルド本社、二〇〇三年五月
中川ひろたか『中川ひろたかグラフィティ』旬報社、二〇〇三年四月

『ユートンBOX 中川ひろたか博覧会』講談社、二〇〇七年七月

竹久夢二『京人形』に関するノート

伊藤 かおり

一、はじめに

本稿では竹久夢二『京人形』（明治四四年三月二六日、洛陽堂）を取り上げる。

『京人形』は『小供の国』に続く子どもを題材とした詩文集であり、表題に「絵ものがたり」の角書が付されている。全二二篇が収録されており、うち三篇がごく短い散文、残りは全て詩および童謡となっている。右ページに詩文、左ページに挿絵が配されており、詩文と挿絵は相互に補完しあっている。

『京人形』が出版された頃、夢二は動乱の時期にあつた。明治四〇（一九〇七）年一月に岸たまきと結婚、翌年二月に長男・虹之助が誕生したものの私生活には恵まれず、明治四二年五月にたまきと協議離婚をし、以降はたまきと同居・別居を繰り返していた。一方、作家としての活動は充実していた。同郷で実業之日本社の社員でもあつた有本芳水の引き立てがあり、この頃には同社の少年・少女雑誌『日本少年』『少女の友』に毎号挿絵を描いていた。他の雑誌にも挿絵が掲載され、夢二の挿絵の掲載されない子ども向け雑誌を見つけるのが難しいほどであつた。その合間を縫って、明治四三年八月、たまきと虹之助を伴って千葉県銚子町（現・銚子市）海鹿島を訪れる。そこで「おしまさん」と出会い、以後、たびたび銚子を訪れ「おしまさん」と逢瀬を重ねた。また、この間に大逆事件で逮捕された幸徳秋水らに死刑が執行され、社会主義活動に関わっていたことのある夢二も警察

の監視を受けていた。その最中、洛陽堂から一二月に『小供の国』、翌四四年三月に『京人形』が出版されたのである。夢二の日記には、明治四四年二月二四日に「『京人形』にかゝる、」との記述があり、ごく短期間で制作を行ったことがうかがわれる。

二、献辞および序文

『京人形』の冒頭には「この一卷を世のうら若き／母君達におくる——夢二——」との献辞が掲げられている。『京人形』の享受者として若い母とその幼い子どもが想定されているといえよう。後述するが、収録された詩には思春期に差しかかろうとする少女が題材となっているものが多く見受けられる。これは『小供の国』および後に出版される『歌時計』と比較すると顕著な特徴である。表題となる京人形の所有者、あるいは京人形に深い思いをかけるのは大体が少女である。夢二はここで自らが抱く少女の概念を表現しなかったのではないだろうか。その享受者として、少女ではなくなってしまうたが少女時代が記憶に新しく、その時代に懐旧の念を抱く若い母を想定しているのも当然といえるだろう。

序文にあたる「扉に」と題した文章で、夢二はこの詩文集の立場を明らかにしている。冒頭で「お伽噺でもないかもしれない、童謡でもないかもしれない、」と述べているが、実際に『京人形』は詩および散文の形式をもつ作品が収録されており、ジャンルとしては未分化である。

夢二は『京人形』で何を意図したのであろうか。夢二はさらに次のように述べている。

——そりや柳の木も、女も、小鳥も、海もみんな一の光を反射した物体と見て、何の意味も何の観念もつけ加へずに描くのもおもしろいけれど、長い間の因襲や習慣や、古い作法や、国語に囚はれた人世や。歌舞伎芝居の女形のやうな物語めいたのや。春のおぼろ夜に丸窓の外から恋歌に思ひのたけを歌ひよれば、障子のうちには几帳により、何と答へも袖屏風、とつおいつする乙女心。極端に自我を没してしかも意氣と張とに命を軽ろんじた、太平の世が私は恋しいのです。

この時期、文壇では自然主義文学が席捲していた。自然主義文学では個人が重視される。しかし夢二は旧来（前近代）の価値観を再評価し、欧米の文化に対しての日本のアイデンティティを追求するのみならず、さらに個ではなく子ども時代、あるいは少女の全体としての心象・イメージを重視して、抽象に寄っている。このことは、明治四三年三月二日付けの夢二の日記にも明らかである。日記には次のように書かれている。

「死」といふ言葉を言はずして死を描くことが芸術のゆく道、

一生懸命にその形容詞と描写に力を入れねばならぬ。そこに芸術の技巧があるのだ。

自然派の花袋の如き田舎爺に何が書けるものか。

百姓に芸術はない筈だ。

夢二は自然主義文学に対して明らかに反発している。自然主義文学が重要視する個を離れることで芸術は完成すると考えていたと解釈できる。

次からは本編にあたる詩文を眺めていきたい。

三、『京人形』に収められた詩・童謡

①少女の詩

『京人形』には特に少女に焦点を当てた詩が多い。その中でも少女と人形の関係を詠ったものが三篇ある。少女と人形に関して夢二は以前から関心をもっていたようだ。それは『小供の国』所収の「小さき母」に既にみられる。「小さき母」では少女と人形の疑似母子関係が描かれているが、これに類するものとして『京人形』第一五篇「お人形さん」が挙げられる。

かあいゝ私のお人形さん／何をそんなにお泣きやるぞ。／／小袖がほしけりや あげます／帯がほしけりや あげます。／／かあいゝ私のお人形さん／何をそんなにお泣きやるぞ。／／お乳がほしけりや あげます／ねんねしたいなら 抱いてあげよ。

二行四連の詩だが、第一連と第三連に繰り返しが用いられる。人形をなだめるものとして、第一連は少女が欲しがるもの、第二連は赤子が欲しがるものをそれぞれ挙げている。

人形に女王としての人格を見立て、持ち主の少女が人形に仕える者として振る舞うのが、第一篇「私の女王」である。

雛よ、雛よ。／おまへはあたいの女王なのね。／鳥に餌をやることもせず／お茶をたてることもせず。／金爛綴子につゝまれて／お膝のうへに斯うちゃんと／手をかさねてゐらつしやる。

少女と人形との関係を描いたものとして二篇を例に挙げたが、いずれも人形に確かな人格を見ているという点で共通している。

『京人形』ではより年長と見られる少女の恋を取り上げたものもある。第一三篇「死と泪」である。これはごく短い散文として書かれたものである。

夕美子の可愛がつた兎が、冷くなつてもう眼をあげなくなつた。夕美子は死ぬといふことをはじめて見ました。死んでしまへば、もう鳥の歌をきくことも、垣根の花を見ることが出来ないのだときいた時、死んだ兎が可哀そうで夕美子は泣きました。

泣いたとて、泣いたとて死んだ兎はもう眼をあげなかつた。

お庭の桜の木の下へ、死骸を埋めて、そこへお墓を建てゝやつた。

月の暗い春の夜に、夕美子が人の情を知りそめて

『うれしい泪』をこぼした時まで、哀れな兎は忘れられなかつたけれど……………。

添えられた挿絵には、「愛する白の墓」と書かれた墓標に向かつて手を合わせる振袖の少女の後ろ姿が描かれている。死の涙と恋の涙が対に語られているが、夕美子の流した二つの涙は、いずれも愛するものための涙だった。恋の喜びに忘れられてしまった兎の悲しさを主として捉えることもできるし、因襲の犠牲となる少女の死の始まりを恋に置いているとも捉えることができる。読み手の状況によつて様々な解釈を許す作品である。

直接的にはないが、巡礼の少女の言葉を通して描かれる死を主題とした詩もある。第五篇「西へ西へ」である。

遠き昔の 物語／春は暮れゆく四国路を／ひとりとぼく／小巡礼／『何処へゆく』とたづねれば／『ゆくえもしらず別れてし／母をたづねて来しかども——』／『その母君はいづこにて／御身のうへをまちたまふ』／『ゆくえは さらに白雲の／世界の果の常春の／たのしき町に 母上は／ゐたまふ由を 三井寺の／僧都はわれに教へけり。／されば夜も日も ふだらくや／鐘を鳴らしてたづねれど——』／世界の果は見えもせず』／『ある時 人に聞きけるは／世界の果は日の落つる／西の空ぞとおぼえけり』／『やさしき君よ／いざさらば／暮るゝにはやき春の日も／旅ゆく身にはいそがるゝ／幸あれ君よ／いざさらば』／泪のうちに 巡礼の／後姿は消えにけり。

この詩の初出は『少女の友』第四巻第一号（明治四四年一月）になる。挿絵からは判然としないが、掲載誌から考えて少女の巡礼を描いていると思われる。「暮れゆく春」は夢二と共に雑誌『日本少年』で仕事をした有本芳水も少年詩でたびたび取り上げた題材である。この作品では「暮れゆく春」と母のいるという「常春」が対になる。母のいるという「世界の果の常春のたのしき町」は「西の空」にあるということから、西方にある阿弥陀浄土を想起させ、すでに母は亡き者となっていることが暗示される。西に向かって旅をする巡礼もまた、明確に言及されていないながら、死に向かっていていることになる。先に引用した日記で夢二は「死」といふ言葉を言はずして死を描くことが芸術のゆく道、と述べているが、まさにそれを実行した詩である。

『京人形』で最も特徴的なのは、女の零落を扱っていることであろう。それは少女に対して年長者、特に母の忠告・憂慮という形で表れることが多い。次に挙げるのは第四篇「つけちがひ」である。この作品は散文で書かれている。

美夜子は物思に忙はしかつた。

それゆへ、友禪の振袖を右を左へつけちがへた。

『まあ美夜さんとしたことが……』お母様はものやさしく『けれど美夜さんはまだ十六ですもの。今に広い世の中へ出て、どんな大きなつけちがへに出逢ふか知れませんか』と仰つた。

母は袖の付け違えにかこつけて美夜子の将来を忠告している。「友禪の振袖」を縫うことから、美夜子は良家の

子女であると考えられる。人生における「つけちがへ」は恋の過ちにおける零落か、またその他の人間関係に起きるすれ違いを指しているのか。いずれにしても親に守られた幸福な少女時代が有限であることを表現している。

第一七篇「山の彼方」では、少女が家族に次々と問いかける。

（姉君よ／山の彼方は いかなる国ぞ）／／（妹よ 山の彼方は常春の／小鳥の歌と 花の香の／夜もなき国と聞きにけり）／／（母君よ／山の彼方は いかなる国ぞ）／／（いとし児よ かの山蔭は常暗の／鬼と蛇の住む 悪の領／人のゆくべき国ならじ）／／（兄君よ／山の彼方は いかなる国ぞ）／／（我妹子よ 峠を越せば七彩の／空に虹あり 地に恋／いとときものよ いざゆかむ）／／（父君よ／山の彼方は いかなる国ぞ）／／（愛娘 彼処こそ世の果の／流るゝ川も 森もなく／『無限』へつゞく沙漠なり）

姉と兄は山の彼方に希望を見出しているのに対し、母と父の答えには恐怖と疲れが見える。母は娘にまだ見ぬ世界への恐れを植え付けて手許に留めたいと思つているとも解釈できる。しかし、ここでは父の言葉が最後に置かれていることに注目したい。父の言葉には人生に対する倦みと疲れが見える。一人息子とその母を養うため、芸術で活計を得なければならない夢二の心境を重ねることもできよう。

よりはつきりとした形で女の零落を詠つたものに第七篇「春や幾歳」がある。

『善き人になれかし』／／と父言ひぬ。／／『美しき乙女となれ』／／と母ねぎぬ。／／春や幾歳／闇はしる鳥とは

なりぬ。

「闇はしる鳥」とは辻に立つて身を売る夜鷹を指すと思われる。両親に愛され育てられた少女が、幾歳か過ぎ、最下層の娼婦に身を落としたわけだが、この間に何があったのか。少女に世間の残酷さを伝える一篇である。

②子どもの論理を取り入れた童謡

『小供の国』やこの後に出版される『歌時計』ほどではないが、『京人形』にもより年少の子どもたちを対象とした詩は存在する。次に挙げたのは第八篇「兎兎」である。

兎よ 兎／おまへの耳は／何故そんなに長い。／枇杷の葉をたべて／それで耳が長い。／／兎よ 兎／おまへは何時も／何をそんなに怖がるぞ。／びつくり草をたべて／それで風が怖ござる。

五行二連の童謡だが、兎を観察しその様子を細やかに捉える。「枇杷の葉を食べているから枇杷の葉のように耳が長い」という子どもの論理、理由付けを取り入れた作品である。

叙情性を排除したユーモラスな童謡も掲載されているが、その多くはマザーグースの訳出であり、四篇が収録されている。ここでは身分の高いものの滑稽な様子が描かれている第二篇「おしのび」を挙げておきたい。

殿様が田舎へいったらば／大雨にあつて／水溜に落ちこんで／臍まで埋つた。／／それから殿様は／二度と田舎へゆかなんだ。

四、おわりに

この稿では、竹久夢二の詩画集『京人形』を概観した。『小供の国』から一貫した、叙情性をはさまない歌が掲載される一方、この詩画集の核を成したのは少女の姿を捉えた作品だった。そこには少女の遊びが描かれ、さらには恋、そして大人となつて後の零落も暗示されていた。少女期特有の感情を描いたのが、若い母親への献辞の理由であろう。夢二は『京人形』発刊の前年に出会った「おしきさん」について、明治四三年一月二日の日記で「ところがあなたは、今まで曾て私の知らぬほど純な少女だった、私はそれだけ、幸福と満足を感じずにはゐられない。」と記している。このイメージが夢二の少女の概念の核を成すものであったのだろう。

参考文献

竹久夢二『絵ものがたり 京人形』一九一一年三月二十六日、洛陽堂

※なお引用にあたって旧字は新字に改め、かな遣いはそのままとした。

『竹久夢二文学館 第八卷 童謡童話集Ⅰ』一九九三年二月二五日、日本図書センター
長田幹雄編『夢二日記 一』一九八七年五月三〇日、筑摩書房

二〇二四年二月印刷発行

白百合女子大学児童文化研究センター
近現代児童詩歌研究プロジェクト

発行 白百合女子大学児童文化研究センター

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘一―二五

TEL 〇三―三三二六―五〇五〇（代表）

印刷所 日本アスペクトコア株式会社

〒162-0814 東京都新宿区新小川町六番二九号

アクロポリス東京三階

TEL 〇三―六三七一―七七二四

